

## 4年制大学における看護教育を考える

林 啓子

医療技術短期大学部教授

### 看護教育大学化の背景

今年度10月1日より、医療技術短期大学部が看護・医療科学類として医学専門学群の中に改組されることになり、看護学と医療科学の2専攻が4年制の医療職業養成課程としてスタートすることになった。わが国では看護職（看護師、保健師、助産師）をはじめとするコ・メディカルスタッフの教育は専修学校や短期大学でおこなわれるのが主流だが、ここ10年余りの間に大学における教育が推進され、中でも看護系大学の増加は著しく、1990年の11校から2001年には91校となり、数年内には100校を超える勢いである。

看護の高等教育化が推進される背景としては、医療サービスにおける「量から質へ」という考え方の転換が大きな要因となっている。これは医療が単に生命を救えばよいという考えから、生命および生活の質を重視するようになってきたこ

とを意味する。看護がこの課題に応えるためには、病む人を生活者として捉え、生物学的な側面だけでなく、心理社会的および文化的な側面から包括的にケアを提供することができる人材の育成が必要となり、大学教育にそれが期待されている。

もう1つの要因として、わが国における保健・医療・福祉を取り巻く環境の変化が挙げられる。医療の高度化、慢性疾患の増加、さらに少子高齢化などにより保健・医療・福祉のニーズが増大し、看護は人々の疾病予防や健康維持増進に関わる活動および高齢社会における医療福祉の担い手として活躍の場が拡大、多様化し、自立して活動できる能力をもった人材の育成が求められている。

### 看護・医療科学類看護学主専攻の教育目標

このような社会的要請に応えるために

看護学主専攻は学群教育において次のような教育目標を立てている。

- \* 基本的人権を擁護し、人々の立場に立って考えられる豊かな人間性を養う。
- \* 科学的根拠に基づく主体的な看護活動が展開できる。
- \* 社会の変化に適応できる能力と高い倫理感に基づいて行動できる能力を養う。
- \* 医療・保健・福祉分野でリーダーシップを発揮できる能力を養う。
- \* 自ら「質の高い看護」を探求する研究的素養を養う。
- \* 国際性を志向し、多様な分野で積極的に活動できる能力を養う。

これらの目標の中で最も重要かつ困難なものは第1の目標であろう。「豊かな人間性」を育むということは、20歳前後の学群学生の人格形成に関わることであり、教育にあたる教官の人間性も問われてくる。

看護とは人が障害や疾病を抱えながらも、その人らしく生活することを援助する活動である。「その人らしさ」を援助するためには、相手の思いを理解し苦しみや喜びに共感できる「豊かな人間性」が求められる。

本学では1、2年生対象に多彩な教養

科目が用意されている。また専門基礎科目にも、全学的な協力を得て、人を多角的に理解するための教科目をカリキュラムに盛り込むことができた。しかしながら看護職に求められる「豊かな人間性」は知識を得ただけでは形成できない。看護教育では臨地実習にかなりの時間を充てているが、学生はこの実習で生命の誕生に立会い、病む人の苦しみを目の当たりにし、時には臨終の床にある人のケアに参加する。そこには学生の想像を超えたさまざまな人生がある。このように看護教育における臨地実習は単に看護技術をトレーニングするだけではなく、看護職としての感性を磨き、「豊かな人間性」を育む場であるが、一方で精神的未熟さによりこの体験に耐えられず挫折する学生が多いのも事実である。若者気質が変化する中で、学習体験を学生の内面的成長につなげることができるような、実習方法の工夫が今後の看護教育の課題である。

第2の目標の「科学的根拠を持った主体的な看護活動」ということは、「きちんとした根拠に基づいた看護をしよう」ということであるが、この背景には、長年看護技術を勘やこつに頼ってやってきたという反省がある。そこに甘んじられていたのは、教育の段階から医師に依存

し、臨床では医師の指示の下に仕事をするという歴史があったからである。それ故に医療従事者の中で看護職は最大人口を有するにもかかわらず、その社会的評価は必ずしも高くはなかった。

近年疾病構造の変化（慢性疾患の増加等）、治療技術の進歩、患者中心の医療意識の変化等により、医療は複数の医療従事者が各々の専門的な知識や技術を集結させなくては対応できなくなってきた。この医療チームの中で看護職が他職種と対等の地位を獲得するためには、科学的根拠をもって自らの活動を説明しなければならないのである。日常的な生活援助技術でも、手技の安全性や効率性を生体の機能構造学的な根拠をもって説明し、効果を証明することが求められる。病気の捉え方1つについても、その病気を病む人を看るという視点から、病気をその人の生活そして人生と結びつけて説明できなければ看護の役割を遂行することができないのである。

### 看護学の発展をめざして

看護教育では「科学的根拠を持った看護」を教授することが当然のように語られているが、実際には看護学という領域は科学的に体系づけられた学問としてまだ十分に確立されてはいない。現在、世

界中で看護学確立に向けての研究と努力が進行中である。その中で日本は2、30年の遅れをとっていることは否定できないが、看護教育の大学化がここ10年間で急速に推進されたことにより、それを挽回するチャンスが生まれてきたのである。このような時期に大学で教育を受ける学生達には日本の新しい看護を担うパイオニアとしての期待がかかるのは当然であろう。

### 新しいスタートに向けて

看護・医療科学類は、既にスタートを切った。一方で医療技術短期大学部は平成17年度をもって25年の歴史を閉じる。看護学科の卒業生のほとんどは現在でもさまざまな方面で活躍し、看護界の中で重要なポストについている者も少なくない。この歴史を礎に筑波大学の看護学があることを忘れてはならない。今後は筑波大学という総合大学の利点を最大限に活用し、さらにつくばという実験的未来都市から人々の幸福に貢献できる看護を世界に向けて発信していくことが、われわれ教官とここに学ぶ学生達のわくわくする大きな目標である。

（はやしけいこ 成人看護学専攻）